



「なあ、そろそろいいんじゃないか？」

いつものごとく、夕暮れどきの中庭のベンチで煙草をくゆらせながら、銀さんは目の前の白衣の女性に尋ねた。

「何が、ですか？」

恵美子が小首を傾げ聞き返す。

ふんぞり返って煙を吹き上げる銀さんの表情は茫々としていたが、目は優しくはなかった。

「俺はお嬢を助けたい。エミちゃんに協力もしたい。だがそっちははチト違うようだ」

「どういう意味ですか」

「そういう意味だ」

銀さんが指で煙草をはじく。

綺麗な放物線を描いて吸いながら灰皿に飛び込んだ。

「俺が、ただエミちゃんに泣きつかれたというだけで今日まで、黙ってあの二人の監視と隔離を続けてきたと思ってたのか？ 悪いがそれ程、俺あお人よしでもマヌケでもねえぜ。狙いはあの坊やか」

「な…何ですか急に、銀さんの言ってる事、よく判らないですよ」

動揺と困惑の入り混じった顔で恵美子が言い返す。

「ワリィな」

パンという衝撃を頬に感じた次の瞬間、恵美子は地面に膝をついていた。

ベンチから立ち上がった銀さんが仁王立ちして見下ろしている。

「シラぁ切るのも相手次第だせ。以前から坊やの不思議な力に随分とご執心だったじゃねえか。あの若造の医者と組んで治療に利用しようとも思ってたか？ お嬢はどうでもいいのか！？ あんた看護師だろうが、答えろっ！！」

人が変わったかのような銀さんの形相だった。

頬に手をあてうずくまっていた恵美子が、ボソリと言葉を吐いた。

「…何が悪いんです」

「？」

「利用して何が悪いんですかっ！ 彼のあの力があれば、加夏子ちゃんだって昔のように戻れるかも知れないんですよっ！ ほかの人だって…あのひとだって…その何処が悪いっていうんですかぁ！！」

キッと顔をあげ銀さんを睨むと、恵美子が叫んだ。

「だからワタシは九十九さんに協力した！ それで全てがいい方へ向かうと信じた！ そのドコがいけないっていうん

ですか！ 銀さんがワタシを責める理由が何処にあるっていうんですかぁぁー！！」

「その坊やの力が、お嬢をあんなにってしまったんだ。知ってたかい？」

ハッとした恵美子の言葉が止んだ。

「聞いたんだ。あの晩、お嬢とあの坊やの間に何があったのか」

「……………」

ゆっくりとしゃがみ込んだ銀さんが、真正面から恵美子の目を覗き込んだ。

「知りたいかい？」

涙目の恵美子がコクンと頷く。

「確かにあの夜、お嬢を救ったのはあの坊やさ。何がきっかけかは知らないが、あの傷を負った時の事を、その時の恐怖を思い出して、そこから命ごと逃げ出そうとしたらしい。よほど怖かったんだろうな、可哀想に」

痛ましい表情のまま銀さんが続けた。

「だがな、よりもよってお嬢は、自分を助けにきた坊やとキチガイ野郎を混同しちゃったんだよ」

「えっ？」

「何でそんな事になっちゃったかは判らねえ… ヒトの心の奥底のことなんて俺には想像もつかねえし、坊やにだってあんな経験は初めてだったらしいからな」

銀さんは、あえて殉から聞いた事実を伏せた。

「そんな…そんなことって…」

恵美子の視線が激しく揺れる。

「なあエミちゃん、よーく考えてみな。坊やのあの力は治療なんぞに使える代物じゃねえ、それどころかひとつ間違えれば他人を破滅させるトンでもねえ爆弾になりかねないんだ」

銀さんの言葉が熱を帯びる。

「もうよさないか、こんな風にあの二人をイジくり回すのは。もう止めようぜ」

「でも…でも…あの子が接した患者はみんな嘘みたいに回復して…そうよ、回復したじゃない！ あのコやっぱり出来るのよ！ そうでしょ銀さん?!」

まだわかんねえのか！

両肩をガッシリと掴んだ銀さんが、目を覚ませと言わんばかりに恵美子の体を激しく揺さぶった。

「みんなが治ったのは坊やの『あの力』のせいなんかじゃねえ！ 誰もかれもみんな愛おしくて、助けたり支えたりしなきゃいられねえあのオセッカイでトンでもなく優しい坊やの心根に触れたからなんだ！ みんな自分で立ち直ったんだよっ！ それが判らねえのか!!」

鬼瓦のような顔のまま銀さんは恵美子を揺さぶっていた。

少しずつ、少しずつ銀さんの動きが遅くなり、やがて止まった。
顔を上げた恵美子は、今度は真っ直ぐに銀さんを見つめていた。

◇

恵美子達が並んで歩く廊下の向こう、西日の差し込む明かりとりの大きな窓に、腕を組んで寄りかかった九十九の姿があった。

「やぁお二人さん、手に手をとってお散歩ですか？」

固い表情のまま歩いてきた二人に、薄笑いの九十九が話し掛けた。

「つまらない冗談ですね、先生」

「おや？ 今日随分とっつけんどんですねえ」

笑い顔はそのままだが、九十九はいつものようなC調になる事無く、交互に二人を見つめていた。

「丁度いい。先生に話しておきたい事があるんだ、清水加夏子の件で」

銀さんが挑みかかるように口を開いた。

「それと堀川君の事について、ですね」

「察しがいいな、なら話が早い。あの二人にこれ以上…」

「『干渉するな、二人に任せておけ、治療に堀川殉を利用するな、彼の能力を試すな』久我さんのおっしゃりたいのは、だいたいそんなところでしょう」

一気に押し切ろうとしていた銀さんは、九十九に機先を制され言葉に詰まってしまう。

「危惧はもっともです、久我さん。ただ貴方も衣笠君も、ひとつ大変な誤解をしている。私は彼…堀川殉のサイコイン能力には何の興味も無い」

恵美子の顔色が変わった。

てめえ…聞いてやがったのか！！

怒気を張らんでグッと一回り大きくなった銀さんの軀が一步前へと踏み出そうとした刹那…

カッシャァァーン！

九十九の手からメガネが床に落ち砕け散った。

銀さんの足が止まった。

「盗み聞きは趣味じゃありません、偶然ですよ」

屈み込んでガラスの破片を拾い集めながら九十九が言った。

「僕の興味はただ一つ。人間の心。それだけです」

「こころ？」

「アァ〜ア、このロイドお気に入りだったんだけどなあ〜」

破片をハンカチに包み、フレームだけになった丸眼鏡を片手に立ち上がった九十九はゆっくりと二人に向き直った。

「僕はね、清水加夏子の『心』と戦っているんです。戦争と言ってもいい。今まで我々は負け続けてきた。これは総力戦なんです。使える武器は多い程いい。僕にとって堀川君はそれだけの存在です、だが衣笠君にとっては違うようですよ」

視線を回しながらレンズの無い眼鏡をかけた。

「どういう意味なんだ？エミちゃん」

銀さんも恵美子に向き直った。

彼女はね、どうしても堀川君の力が必要なんですよ
彼の能力の秘密を解き明かし、利用する
それが駄目なら彼自身を実験台にする事もいとわない理由があるんです

レンズの無い眼鏡の奥で、九十九の眼光が徐々に強くなる。

「そういえばさっき『あのひと』とか言ってたよな。それが何か関係あるのか？」

俯いてしまった恵美子を銀さんが問い詰めた。

「なあエミちゃん、何か他人に言えないような事情でもあるのか。水臭いじゃねえか、言ってくれよ」

僕から言いますか

別に秘密にする事でもないでしょうと九十九が口を開こうとした時、恵美子が顔を上げキッパリとした口調で言った。

先生は黙っていて下さい
これは私の問題ですから

「…婚約していたんです、私達。今から四年程前の事でした…」

一言々々、嘸み締めるようにしながら恵美子は銀さんに向かって話し始めた。

「彼は古い和菓子屋さんの二代目、私はそこを最頂にしていた旅館の女将の次女。家同士も仲がよくて、私達は当然のように結婚するものだと思ってた。彼に症状が現れた、あの日までは」

「症状？ エミちゃんの彼氏が病気だったって話なのか」

「酷かった。あれ程急に症状が進むのはとても稀だと言われて、でもそんな言葉は何の慰めにもならなかった。一年も経たない内に、彼の記憶の大半は失われてしまったの」

「おい、そりゃあ…」

「激症性若年アルツハイマー、めったに起こらない病気です。私も事例にお目にかかった事はありません」

九十九が脇から補足した。

「母は、跡を継ぐまでの社会勉強だと言って私が看護学校に進むのを認めてくれてた。私も最初は安っぽいヒューマニズムから看護師を志していた。でもあの時私は誓ったの、治療法を探す…一生かけても私が彼を治す、治してみせるって！」

言葉を吐き出した恵美子の顔は激情で歪んでいた。

「あのひとを治す為なら何だってする！ 悪魔がいるなら取引したっていい！ 私は…私には、それが全てなの！ それしかないのよ！ だから！！」

「だから九十九先生の言いなりになった、って事か」

フゥ〜と銀さんが息をついた。

西日は夕日に変わりつつあった。

「そういう訳で、彼女には大事な役目を担ってもらっています。少なくとも私達二人の利害は一致している。貴方はどうですか？ 久我銀次さん」

ズンと斬り込む重さで、九十九が問いかけた。

「俺はあの二人にとって一番いい結果を出してやりたい、それだけだ」

「なら問題無い。一緒にやりましょう」

「断る」

「ほう、何故？」

九十九の口の端がクイツと釣り上がった。

「先生、あんたにとって今が戦争だというのは判る。精神科の医者だからな。でも俺はトレーナーだ、心って奴が切った貼ったで何とか出来るとは思っちゃいない。あの二人は自分達で答えをださなきゃならない。そういう定めなんだ」

「定め、ですか。えらく芝居がかってますね」

「そんなんじゃねえ、そんな生易しいもんじゃねえんだ、あいつらはなあ！…」

.....

そこから先を銀さんは言う事が出来なかった。

言えば殉も加夏子も、今とは違う嵐の中に巻き込まれてしまうから。

「久我さん。彼女と堀川君を私達の監視下で引き合わせます。万が一、彼のサイコインが前回のように彼女の深層意識に障害を与えそうになったとしても、コントロールされた環境ならば被害は最小限に抑えられる。彼女の心の障壁を突破する、これはまたとないチャンスです。この事は決定事項として了承願いますよ」

「しかし」

「堀川君が一時帰宅から戻り次第、とりかかるつもりです。協力するしなは御自由にして頂いて結構。でも何も出来ず頭を抱えているよりは、私達と一緒にやった方がよほどいい結果を残せると思いますけどね」

こいつ、俺まで見張っていたのか

この分じゃエミちゃんの事情も何もかも、全部知った上で仲間にしたんだろう

「…好きにしたらいい。その時がきたら考えるさ」

「いいでしょう。では後程、戦場で」

二人に背を向けた九十九は、ゆっくりと廊下を遠ざかっていった。

「ワザと、だ」

「え？」

「眼鏡を割って俺の気を殺いだ。恐ろしくケンカ慣れしてやがる。一体どういう男なんだ」

「…」

「いいぜ、エミちゃん。迷うなら迷えよ。自分のやらなきゃならない事が何なのか、よく考えな。俺は自分に出来る事

をやる」

「銀さん…」

恵美子はそれ以上、口を開こうとはしなかった。

◇

三日後の朝、堀川殉が一時帰宅していった。